

特集

谷熊村歌舞伎之居
にひひ

佐久間定次 (昭和十二年卒)
鈴木俊哉 (昭和二十七年卒)

特 集

谷熊村歌舞伎芝居について

佐久間定次（昭和十三年卒）
鈴木俊哉（昭和十七年卒）

明治末期に到り、素人芝居として始められたのは別紙名簿の如く、明治生まれの人達により、村芝居として演じられてきた。大正時代より昭和初期には丹墾した演技者は、登録許可証を収得し、三河田原駅近くの『東映館』及び柳町の『田原座』の舞台で演じ、地元を始め豊橋方面各地に於きプロとして熱演してきた。それらの人はすでに芸名があり、今も保存されていると思うが、谷熊常連寺舞台で最後まで使用した桜花爛漫の大引幕に芸名も染め抜かれている。

戦時中は一時中断したものの、終戦直後の農村は冷えきつた世相の空気を少しよでも晴れやかなものにして、うと、若き青年男女が村を愛する情熱は素晴らしく、奉仕の精神は強かった。

その当時、一般農家では米、麦、甘藷の単純な作物と浦（市内浦町）は最も盛

を耕作するのが村の姿であった。金毘羅山の禿げ山に多くの先輩が桐を植え、小麦を蒔き付け収穫していた。新しい試みとして、村中の田植えの終わつた家々の植え残りの苗を集めて、池に流れ落ちる水位の浅い部位を整地して田植えをしたり、養魚池を借り受け田植えをしたりして二十数俵（一俵六十kg）の収穫をした。農協を通じて検査を受けた。更にこの残余を米は村の区長（現在の自治会長）さんに提供したり、青年会としては年間の必要量を確保し青年体育大会、特に岩崎神社秋祭りの余興の資金及び食糧に当たりした。一切の経理は全て青年会で執りしきっていたのである。

昭和二十一年、二十二年連続常連寺舞台で演じた余興は、消防団青年男女（子役）は一人一芸以上を演ずることを申し合わせにより出演したのである。尚、この頃まで谷熊敬老会は公会堂に於いて開かれ、青年会員により三河万歳七福神、その他色々演じたものである。

田原町内外でも谷熊芝居



んであった。豊島青年会も芝居を始めたのも、谷熊の師匠である木下左右、鈴木源次郎両氏により指導されたのである。しかし一時のことであり、遂に谷熊の芝居も最後の幕となり、世の移り変わる波に乗りきれず消滅したのであるうか、當時を偲び祭りを通じ唯一の村民和合親睦の場として、一時代を風靡した村の歴史に残る証にもなったことだろう。

華やかな江戸歌舞伎を南山大学生が、目下研究対象を実際に体験してしまおうと、江戸歌舞伎「白浪五人男」の上演に挑戦との記事が、平成十七年一月の中日新聞県内版に紹介された。伝説の地芝居で知られる新城（愛知県新城市）歌舞伎



の関係者から、五人男のカツラを借り本番に供えるところ。演じるのは「白浪五人男」河竹黙阿弥作の「青砥稿花紅彩画」(おおとぞうしはなにしきえ)のうち、日本駄右衛門弁天小僧ら五人の盗賊が揃踏みをする、クワイマックスの一幕「稲瀬川勢力揃いの場」である。

谷熊村歌舞伎芝居の本流は江戸歌舞伎の本場東京で、すでに歌舞伎役者として舞台を踏んでいた松本花江氏(本名)で松本高麗次郎(コヤジロウ)又は高麗屋(コウライヤ)と云う芸名である。豊橋市小池町に住み付き歌舞伎演技の師匠として知られ活動していた。そこに、谷熊村の鈴木源次郎氏等が通い全てを修得して、後進の指導をされていたのである。又、貸衣装も豊川にもあり実際に利用された人も居たと聞かすが、昭和二十二年秋祭りに松本花江氏宅より借りた衣装が最後であつた。

ここに谷熊村各部門別演技出演者名簿及び谷熊歌舞伎台本保存一覽控を添付し置く。

平成十七年二月三日

平成十七年二月二日

各部門別演技

出演者名簿

◎明治生まれ
◎昭和生まれ
【受】
☆木下左右
☆佐久間慶一郎
☆伊原政一
☆佐久間寿三郎
☆彦坂竹一
☆佐久間武一郎
☆田中茂一
☆安田左助
☆彦坂素一
☆彦坂義一
☆彦坂逸郎
◎安田司良
◎安田時示
◎田中正己
◎田中保雄
◎佐久間須夫
◎森弘
◎佐久間信一
◎彦坂一明
◎安田充夫
（子）米澤つた子
◎鈴木とし子
【薄才】
☆安田種一
☆佐久間寿三郎
◎田中保雄
◎佐久間定次
◎田中右一
◎佐久間信一
◎鈴木保夫
【作品】ミヅク
☆米澤房三
【舞踊】
◎佐久間孝
◎安田みよ
◎彦坂スエ
◎彦坂芳子
◎彦坂いく
◎鈴木つるの
◎彦坂ちえ
◎鈴木みや子
◎彦坂尚子
◎伊原いね
◎佐久間あやの
◎安田ふみ
◎安田ミ
◎安田肇子
◎彦坂かよ
◎安田ミヨノ
◎伊藤幹子